

いただいた。

「社協災害ボランティアセンター」は、前回の経験をフルに活用し、皆さま方のご協力のお陰で運営・機能することが出来た。

救援活動におおかたの見通しがついた10月27日をもって「社協災害ボランティアセンター」は閉鎖した。

また、10月29日現在の支援金は、4,789,540円であった。

「社協災害ボランティアセンター」は、1度目は8月19日に立ち上げ9月10日をもって閉鎖し、9月29日の2度目の台風で再開することになり、結果的に10月27日までのおよそ2か月半活動し、ボランティアの延べ活動者数は、1万3,112人であった。

4. キーワードは「Nボラ市民」方式と「祭り文化」

社協は、平成15年4月に従来の「ボランティアセンター」を「ボランティア・市民活動センター」に組織替えをしていて、日頃からNPO法人やボランティア団体、市民活動団体、企業等との関係づくりに努めていたのが幸いし災害時の協働体制づくりにより影響を与えた。それぞれがバラバラに活動していた地域もあると聞いているが、今回のような水害ボランティアではヘドロのかき出しなど力仕事が多いので若い力が必要とされ、また、他機関との多様な連携が重要となり、企業やNPOまたは高校生などあらゆる方々との協働が欠かせません。「Nボラ市民」（「N」はNPO、「ボラ」はボランティア、「市民」は市民活動を意味し、NはNi ihamaのNでもある）と私たちは呼んでいて、すでに新居浜市スタイルが作り上げられている。また、新居浜市には、古くから伝わる四国三大祭りの1つである豪華絢爛・勇壮華麗な「新居浜太鼓祭り」（毎年10月16、17、18日実施）がある。この祭りは、自治会を中心として運営したり、地域間での統一行事または、市全体が一体感を持てる祭りである。その祭りを通して築いてきた人間関係が災害時の地域の助け合いに活かされ、「祭り文化」による災害復旧活動も行われた。これらキーワードに災害救援という同じ目的に向かって協働することが出来た。



新居浜太鼓まつり

5. 災害ボランティア懇談会開催（10月30日）

「社協災害ボランティアセンター」閉鎖後、すぐに災害時のボランティア活動を様々な角度、視点から振り返り、今後の災害・防災を共に学ぶために「H16 新居浜災害 ボランティア懇談会～2度の災害を乗り越えて～」を開催し、多くの市民が集った。懇談会では、「被災者の声」として自治会長と一般市民、「現地ボランティアセンターの立ち上げ・運営」として社協スタッフ、「ボランティアを体験して」では市内外のボランティア、企業、青年会議所、高校生、大学生及び一般主婦、「建設業会とボランティアの連携」として新居浜建設業協同組合、「医療ボランティアの取り組み」として看護ボランティアグループ、「行政（災対）との連携」として社協スタッフ、「議会との連携」として県議会議員など様々な立場の19名の発表者が体験談を語り合った。その後、活動を通して得たノウハウと、この懇談会で得た教訓、反省点を整理し、『地域のために』平成16年新居浜災害復旧支援ボランティア活動報告書という冊子を作成しこれら活動の伝承とさらなる地域防災活動強化に努めている。



懇談会の様子

6. 災害ボランティア活動～今後に向けて～

ボランティア活動を支える受け皿＝災害ボランティアセンターづくりには、はずせない7つのポイントがある。

①柱を決める

災害ボランティアセンターは、「地域のために地域が主役」であり、被災した地域住民が主体となって活動出来る体制整備を行い必要に応じて多方面との協働を図りながら運営することが望ましい。

災害ボランティアセンターの立ち上げ運営では、どこが機関が中心となり決断するのか柱が立たず失敗する場